

聞こえる音、聞こえない音——コプト正教会の音風景についての一考察

三代川寛子

1. 聞こえる音——カイロの音風景

エジプトの首都カイロは、近郊も含めれば人口およそ二〇〇〇万人を擁する大都市であり、さまざまな背景を持つ人びとが行き交う、たいへん活気に満ちた場である。特に二十一世紀に入ってから、従来のナイル川沿いの市街地だけでは人口を吸収できなくなり、周辺の砂漠地帯を開拓して市街地が新たに造成されている。「十月六日市」「ニュー・カイロ」「第五地区」などと呼ばれる地区がそれにあたる。このように拡大を続ける大都市カイロは、そこに生きる人びとの営みを反映して、さまざまな種類の音に満ちている。

たとえば、混雑した車道からは、自動車のクラクションが一日中鳴り響く¹⁾。それに加えて、結婚式があった場合、新郎新婦およびその家族、親族、友人らを乗せた自動車が車列を組み、祝福のクラクションを派手に響き渡らせる。バス停に行けば、マイクロバスと呼ばれる乗り合いタクシーの運転手が行先を大声で叫び、客を集めている。乗客も、行先の確認および乗車する意思表示のため、地名を叫ぶ。人が集まるバス停には、飲み物や菓子を売る者もあり、新聞売りは主要な新聞の名前を節をつけて読み上げる。

地下鉄の駅に入れば、地下鉄の車両がホームに入ってくる際のサイレンがけたたましい。地下鉄は、通勤ラッシュの時間帯であれば、女性専用車両でも身動きできないほどの混雑になるが、比較的混雑していない時は、車両の中にしばしば物売りがやってくる。彼らは、売り口上と値段を早口でまくしたてながら商品を乗客に配る。商品は、髪留めから子ども用の文房具、キッチン用品、ストッキング、ミントのタブレットなど多様だ。この場合、乗客はそれを買いたければ代金を、不要であればその配られた商品を売り子に渡すことで取引が成り立つ。

住宅街にも、様々な物売りが往来する。代表的なのはパン屋で、彼らは独特の節をつけて「アエーシ！（エジプトのアラビア語でパンを意味する）」と叫びながら自転車でゆつくりと住宅街を通り抜けていく。エジプトでパンといえば「バラディー（その土地の、地元の）」と呼ばれる丸い平たいパンで、焼き立ての温かいパンをプラスチックの袋に入れると湯気でふやけてしまうため、売り子は頭上に乗せた縦横一・五×一メートルくらいの網の上に広げてそのパンを運ぶことが多い。その状態を維持したまま自転車の乗降をするのだから器用なものである。

他にも住宅街に頻出するのはガス屋で、彼らは自転車の後ろに積んだガスボンベを工具で叩き、甲高い金属音を響かせながら

ら、ガスボンベの交換が必要な家を探す。このガスボンベは料理用のコンロやオーブンに接続して使用するもので、都市ガスが導入されていない住宅に住む人びとにとつては重要なライフラインとなっている。

住宅街には、ルバベキヤと呼ばれる廃品回収・買取業者も頻繁にやってくる。かつては「ベキヤ！」と叫びながら自転車でリヤカーを牽引するスタイルが一般的であったが、最近はそのリヤカーにラウドスピーカーを乗せて、「なんでも引き取ります」という旨の録音された宣伝文句を大音量で流しながら自転車で移動する形に変わってきている。ルバベキヤに不用品を引き取ってもらう場合、査定により買い取ってもらう場合もあれば、無料で引き取りとなる場合もある。彼らのリヤカーに乗っているものは、柄が折れたほうきや壊れた椅子、元が何だったのかわからない機械の一部などで、引き取った品物は修理した上で商品として、あるいは分解して部品として再販されたり、住宅街に現れる業者のいずれの場合も、客は道で呼び止めたり、バルコニーから声をかけたりしてサービスを受ける。

住宅街に響く音は他にもある。筆者がやや庶民的な地区に住んでいた頃、自宅にいと、近所の人たちが忘れ物をしたりしてバルコニーの下から上の階の自宅にいる家族に大声で頼み事をする声が頻繁に聞こえた。そして家にいる家族は、ロープで吊るした籠に頼まれたものを入れて下に届けるのが常であった。当時は、近所の人が出勤する時、毎朝車のエンジンがかからず何度も何度も試してようやく車が動き出す様子が目覚まし代わりとなっていた。さらには、ロバが、あの独特な鳴き声を近所に響き渡らせているのもしばしば耳にした。ロバ

は、往々にして野菜や果物に乗せた台車を牽引しており、その大人しそうな容貌からは想像もつかないような独特な鳴き声で鳴く。しいて例えるなら、大音量かつ速いテンポの往復いびき²とでも言えようか。犠牲祭³の頃になると、犠牲の羊たちが連れてこられて近所に鳴き声を響かせる。この地区には、ラマダーン月の断食の間、日の出前に朝食をとれるように太鼓をたたいて人々を起こして回るムサツハラティーも現れた。この地区のムサツハラティーは、太鼓のみならず楽器を演奏する者や歌う者もいる四、五人の集団で、自分の名前を書いた紙と若干の心づけを渡すと、バルコニーの下で呼びかけの部分にその名前を使って歌を歌ってくれた。

このような、カイロに暮らすと聞こえてくる音／声は、例えば「アラブの春」を支えたロックやラップ音楽のように政治的メッセージが込められているわけでもなければ、伝統音楽のよいうな芸術性もなく、イスラームのアザーン（礼拝への呼びかけ）やクルアーン朗誦などのように宗教的な性格も持ち合わせていない。そのため、これらの音が書きとめられ記録されることはあまり多くないように思われるが、それは確かにカイロに暮らす人々の日常生活の中から発せられ、カイロの音風景の一部を形成している。

2. 聞こえない音——コプト正教会の音風景

このように、大都市カイロは多様な音に満ちているが、自ら探し求めない限り、ほとんど耳にすることがない音もある。コ

プト正教会に関する音である。

コプト正教会とは、エジプトに根差した教会で、福音記者聖マルコがアレクサンドリアにキリスト教を布教した際に成立したと考えられている。その歴史を反映して、コプト正教会の長は「アレクサンドリア教皇・聖マルコ大主教管区総主教 (Pope al-iskandarīya wa batriyark al-kirāza al-nuquṣṣīya)」と呼ばれる。コプト正教会はその成立以来エジプトを拠点としてきたが、同教会がエジプトの主流な宗教・教派となった時代はごく短かった。それに該当するのは、三二三年にコンスタンティヌス帝がキリスト教を公認してから四五一年のカルケドン公会議で同教会が非主流派の立場に陥るまでの時期にほぼ限られる。このカルケドン公会議で、アレクサンドリア教会の第二十五代総主教ディオスコロス³は、キリストの神性と人性に関する議論でローマおよびコンスタンティノープル教会と意見を異にし、袂を分かつたのであった。以後、アレクサンドリアにはビザンツ帝国の主流派であるカルケドン派（のちのギリシア正教会。当時はメルクイト派とも呼ばれた）と非カルケドン派（のちのコプト正教会）の総主教が並立し、両者の対立の時代が続いた。六四一年のアラブ軍のエジプト征服以後は、ビザンツ帝国側の教派であるカルケドン派が冷遇された一方、非カルケドン派が優遇されたものの、いずれもイスラーム世界に生きるズインミー（庇護民）として従属的な地位におかれた。

十九世紀以降は、エジプトが近代化の道を歩み、国のあり方も国民国家へと変容していく中で、コプトの人びとはムスリムと平等な権利と義務を持つエジプト国民としての地位を得た。エジプトはイギリスの植民地支配を受けたが、反英独立運動で

ある一九一九年革命で、三日月が十字架を抱く旗が使用され、ムスリムとコプトが連帯し共闘したという記憶は現在でもエジプトの国民統合の証しとして語り継がれている。

しかし、様々な形でコプトに対する差別問題は残っており、一九七〇年代以降は宗派対立事件もしばしば発生している。一般に宗派対立事件と捉えられている事件には、一般市民の間の争いが拡大したものや、警察によるコプトの人びとへの差別・虐待事件なども含まれるが、一九九〇年代以降はジハード主義者によるコプトの人々を標的とした暴力行為が増加しており、特に二〇一七年にはカイロおよびアレクサンドリアの主要な教会を標的とした自爆テロ、エジプト中部の修道院への巡礼バス銃撃事件などが続発した。

以上のような歴史的経緯から、コプトの教会堂や修道院は視覚的に目立たないよう工夫がなされており、特にカイロでは高い外壁と植木で覆われている場合が多い。オールドカイロなどの古い教会では、教会堂の建物自体に窓がないか、あるいは明かり取り用の小さい窓が高い位置に設けられるなど、外から内部の様子がわからないような配慮がなされている (Ranzny 2011: 25&259)。

また、かつてはエジプトでもミサ⁴の始まりを知らせるために鐘が使用されていたが、西暦八五〇年に教会における鐘の使用を禁じる命令が出されてからは、木板を木槌で叩くことで鐘の代わりとするようになった (Butler 1894: 80)。この禁令には、キリスト教に対するイスラームの優位を示す意図があったと考えられる。それに加えて、当時編纂が進んだイスラームの伝承集⁵ (ハディース) の中に、「(慈悲の) 天使も犬を連

れたり、ベル⁶を持って旅する一行には同伴しない」「ベルはサタンの楽器」(イマーム・ムスリム・ビン・アル・ハッジャー 1989: 205) というものがあるなど、イスラーム的な観点から鈴や鐘などが「忌避すべきもの」⁷と位置づけられたことも影響しているようである。



図1: 鐘塔のあるムアッラカ教会

Butler (1884: 80) によると、一八八〇年代の段階でもコプト正教会で板と木槌が鐘の代わりに使用されていたようであるが、現在では

ミサの始まりを知らせるために鐘が使用されるようになっていいる。ただし、教会の絶対数が多くはないことから、鐘が鳴る時間帯に近くにいないと教会の鐘の音にはなかなか気づかないかもしれない。教会の鐘は、他にも結婚式、葬式、教会の高位聖職者による訪問があつた際に打ち鳴らされる。

鐘との関連でいえば、ローマ典礼を行うカトリック教会では、ミサの開始時と聖変化の前に小鐘を使用するが、現在コプト正教会ではミサで鈴や小鐘を使用することはない。三〜六世紀ごろのキリスト教の遺構からは小鐘が発掘され、十四世紀の記録には教会の祭壇を聖別する儀式で司教が鈴 (naqus) を三回鳴らすという記述があり、十七世紀にはドイツからの旅行者

がコプト正教会のミサで鈴が使用されていたと書き残しているが、その後いつ鈴や小鐘が使用されなくなったのかは不明である (Moffah et al. 1991: 36, 38)。

鐘の音が教会の外に向けて発せられるのに対して、教会の外に響くことが稀なのがコプトの宗教音楽である。コプトの宗教音楽は、大まかに、教会のミサで使用される典礼聖歌「ラフン (lahn 複数形アルハーン alhan)」、聖母マリア、諸聖人、使徒らを賛美する歌「マディーフ (madih 複数形マダーイフ madai'ih)」、そして教会の外で一般信徒たちによって歌われる宗教歌「タルテイル (tartil)」「タルニーム (tarnim)」の三つに分けられる。

このうち、マディーフは、聖人の祭りの時や、信徒たちが聖人廟や修道院を訪問した際などに、関連する聖人を讃えるために歌われるものである。待降節の時には聖母マリアを讃えるマディーフが毎日教会で歌われる。歌詞は、マウワールと呼ばれるエジプトの民衆の間に伝わる詩と類似しており、その土地で収穫される果物や季節に関する事柄、その土地の日常生活に根差した比喩などが用いられるという特徴がある (Randy 2014: 107)。マディーフは一般信徒の男性も女性も歌い、伴奏にはさまざまな楽器を用いてもよく、メロディーは単旋律で繰り返しが多い。後述するタルテイルと比較して、民衆の間に伝わる古典的・伝統的な宗教歌と言えるだろう。

タルテイルあるいはタルニームと呼ばれる種類の歌は、いわゆる賛美歌で、十九世紀にアメリカからやってきたプロテスタントの宣教師たちがもたらしたものである。当初は「主よ御許に近づかん」などの英語の賛美歌をアラビア語に訳したも

のが歌われていたが、やがてコプトの人びとが自ら作詞作曲するようになった。一九二〇年代にコプト正教会の日曜学校運動が盛んになると、同運動を通してタルティールが普及して人気を博し、同運動の指導者であったハビーブ・ギルギス (Habib Girgis, 一八七六—一九五二) からも自らタルティールを作曲した。タルティールは現在でも人気が高く、「よりよい人生」(al-hayat al-afdal) という名のバンドや、シンガーソングライターのマール・ファーズなどがタルティールの歌手として著名である。タルティールは、歌詞を除けば普通のポピュラー音楽とあまり変わるところがなく、教会の外では最もコプトの人びとにとって身近な宗教音楽と言えらる。また、タルティールでは女性歌手が活躍しており、タルティールが普及したことでコプトの宗教音楽における女性の役割に新たな地平が開けたと言えらる (Ranzzy 2014: 164-165)。

とはいえ、コプト正教会の宗教音楽の中核をなすのは、典礼聖歌に相当するラフンであろう。コプト正教会は、そのミサ全体が聖歌で成り立っていると言っても過言ではないくらい、ミサに聖歌を多く用いる。また、Ranzzy (2014: 161) が指摘するように、コプト正教会の教えでは、人間の地上での生活は人間の魂にとってつかの間の旅にすぎず、魂は常に神の許に戻ることを見望しているとされている。そしてミサの典礼聖歌は、死後天国で神を讃えて永遠の時を過ごす状態を地上で一時的に再現したものと考えられている。そのため、典礼聖歌であるラフンは、神との霊的な交わりを得るために必要不可欠なものと考えられている。

コプト正教会の聖歌の特徴としては、単旋律で和音を用いる

ことはなく、小さなシンバル (daf) あるいは naqus) とトライアングル (triano あるいは muthallath) でリズムを取るもの。それ以外は楽器による伴奏がなく、男性のみによって歌われるという点が挙げられる (Gabry-Thienpont 2017: 80)。ただし、聖歌にはマラッター (maradāt) と呼ばれる会衆による返答の部分がおり、その部分は女性信徒も歌う。

ラフンはまた、聖歌という歌のジャンルを指す語としても使用されるが、メロディーの型という意味でも使用され、その意味でのラフンはアラブ音楽のマカーム⁹に近い概念とされている (Mofah et al. 1991: 6)。また、教会暦に合わせて、「断食のラフン」(四旬節)、「悲しみのラフン」(聖週間および葬儀)、「喜びのラフン」(主の七つの大祭: 受胎告知、降誕祭、主の洗礼、枝の休日、復活祭、主の昇天、聖霊降臨) など複数のラフンが使い分けられる (Gabra 2008: 208)。同じラフンに異なる歌詞を乗せて歌う場合もあれば、同じ歌詞を異なるラフンに乗せて歌う場合もある。

聖歌に使用される言語は伝統的にコプト語、ギリシア語、アラビア語であったが、一九五〇年代以降は信徒の海外移住が進んだため、英語など移住先の言語が聖歌に使用されるようになってきている。さらに一九九〇年代以降は海外宣教にも力を入れるようになってきており、その流れで二〇一六年には、京都の木津川市に聖マリア・聖マルコ日本コプト正教会が開堂した。同教会では伝統的なラフンに日本語の歌詞を乗せて聖歌を歌い、それを YouTube などのインターネット・メディアに掲載している (Japan Coptic Church 2018)。「私たちに平和をお与えください」「私たちの罪をお許してください」「主よ、憐れみたま

え」などの日本語の歌詞がコプト正教会のラフンで歌われるのを聞くと、コプト正教会の長い歴史と伝統、そして新しい時代に適応して生き延びていく柔軟性と生命力を感じずにはいられない。しかし一方で、海外布教と、コプト正教会が「エジプトの教会」として歩んできた歴史はどのように関連づけられるのかという疑問も同時に去来する。

こうした典礼聖歌は、主としてアーリフ (arīf 知る者)、ムアッリム (mu'allim 教師) などと呼ばれる盲目のカントル (歌手) たちによって歌い継がれてきた。かつて、視覚に障がいがある人びとは、視覚を失った代わりに鋭敏な聴覚と高い記憶力を得ると考えられていたため、視力を失った男子は教会のカントルとしての教育を受けることが多かった。現在では衛生環境が改善されたため、感染症などによって視力を失う子どもの数は大幅に減少したものの、視覚障がい者が優れた歌い手とみなされる傾向は現在でも強い (Gabry-Thienpont 2017: 83)。

このカントルたちに対する専門的な音楽教育が行われるようになったのは十九世紀末以降のことであった。十九世紀半ばごろまでのコプト正教会では、聖歌のメロディーやリズムは基本的に書き留められることはなく、各教会において口伝で伝えられていたため、歌い手によってメロディーや歌詞が異なっていた。そのため、総主教キリルス四世 (在位一八五三—一八六一、別名「改革の父」) は一八五九年に『助祭たちの奉仕』 (Khidmat al-Shamānisa) と題する書籍を出版してラフンの統一を図り、その改革を引き継いだキリルス五世 (在位一八七四—一九二七) は一八九三年にカイロのバフナサー地区にコプト正教会の神学校を設立し、その音楽部門でカントルたちに対する

専門的な教育を行った (Gabra 2008: 208)。その後、一九七七年にアシュート県のムハツラク修道院¹⁰内にデイディムス¹¹研究所 (ma'had al-dīmus il-murattin) が設立され、エジプト有数のカントル養成所として機能している。

デイディムス研究所は、中等教育以上の修了者に対して六年間の教育課程を提供しており、それを通して典礼聖歌に精通したカントルを育成する。そこでの音楽教育は口伝で、西洋式の楽譜は用いられないが、代わりに斜線を並べたような形の独特の楽譜¹²が補助的に使用される。これは、ハツザート (hazzāt 動き) とかハラライト (harā'it 地図) と呼ばれる簡易的な表記法で、デイディムス研究所に限らずエジプト各地の教会で使用されている (Ranzay 2015: 71)。この斜線の楽譜には厳格な規則が存在するわけではなく、教師によって譜面の書き方が異なるなど、あくまでカントルたちが記憶するのを助けるメモ書きのようなもので、それ単体で音が再現できるものではない。しかし最近では携帯電話も含めて録音機器が安価に手に入るようになったため、録音データを併用して、この斜線の楽譜では記録できない情報を補いつつ、口伝と暗記を基本とする音楽教育が継続されている (Gabry-Thienpont 2017: 86-88)。

ところで、二十世紀のコプトの教会音楽を語る上で避けて通れないのが、ラーギブ・ムフターフ (Rāghīb Muftāh 一八九八—二〇〇二) という人物である。水野 (2008: 94-95) が指摘しているように、ムフターフはコプトの教会音楽に人生をささげた人で、一九五五年にコプト学研究所 (ma'had al-dīrasat al-ghīya)¹³ がカイロの総主教座内に設立された時はその音楽学科の学科長となり、音楽教育に尽力した。ムフターフ自身は西

洋式の楽譜を読むことはできなかつたが、欧米の専門家の助けを借りて、カントルたちの歌う聖歌を西洋式の楽譜に書き起し、録音する作業を七十五年以上にわたって続けた。その成果の大半はワシントンDCの米国議会図書館に収蔵されている(Ramzy 2015: 65)。また、ムフターフはコプト正教会の教会音楽、特にラフンが古代エジプトにルーツを持つと主張したファラオ主義者としても知られている。

このムフターフのコプト音楽の保存活動について、Ramzy (2015) は、興味深い点を指摘している。ムフターフに協力して実際に採譜を行った英国人アーネスト・ニューランドスミス(Ernest Newlandsmith) は、コプト音楽は古代エジプトの音楽を元の形のまま現代に伝えるものであるが、「アラブ的瓦礫」の下に埋もれているため、それらを取り除いて真の姿を再現しなければならぬと考えていた(Ramzy 2015: 77)。また、コプトの人びとが自らの宗教音楽に対して近代化を試みた時、それはラフンを西洋式の楽譜に採譜して「読める」ものにしようとする試み、そしてラフンを科学的に研究する試みとして現れたのであるが、そうした試みの中には、オリエンタリズムの偏見が埋め込まれていた。すなわち、メリスマ¹⁴などの装飾的な歌唱法や微分音、即興演奏などの非西洋的要素を「アラブ的後進性」と否定的に捉える価値観が引き継がれていたのであった(Ramzy 2015: 74)。

そうした状況を背景として、ムフターフ・コレクションに残されているラフンの録音では、後進性の象徴である「アラブ的瓦礫」、すなわち装飾的歌唱法や即興的要素が通常よりも控えめとなつているという。ただし、ここで「通常」と書いたよう

に、現在エジプトおよび在外コプト共同体で実際に歌われているラフンでは、装飾的歌唱法や即興がふんだんに用いられており、ムフターフ・コレクションの録音との差が際立っている(Ramzy 2015: 78-79)。しかし、ムフターフ自身は、コプトのラフンをあくまで「ありのまま」の姿で記録・保存することを目指したのであり、ムフターフ流の「近代的」ラフンを創出してその普及を推進していたわけではない。また、コプトの人びとの間でも、宗教音楽の近代化のあるべき姿は一様ではなかった。そのため、ムフターフおよびその支援者たちが意識的に、あるいは無意識的に取り除こうとした「アラブ的瓦礫」が簡単に消し去られることはなかつたのである。

3. 聞かせる音——音楽による平和への訴え

前節で述べたようなコプト正教会の宗教音楽は、教会あるいは教会関連施設の外で披露されることは稀である。もちろん現在では、インターネット上や、Aghapy TVやCTVなどのようなコプトが所有し運営する衛星放送局¹⁵で、ミサの様子やマディーフ、タルニームの映像音声の日々放映・配信されており、コプトの宗教音楽がすべて教会の壁の中に閉ざされているわけではない。しかし、インターネットも衛星放送も視聴者が自らコンテンツを選ぶ種類のメディアであるため、敢えて求めない限りは、部外者がコプトの宗教音楽に触れる機会はほとんどないという状況に大きな変化はない。ちなみに、エジプトの地上波のテレビ局でコプトのミサが放送されることは皆無に近

く、仮にあるとしても、大統領が降誕祭のミサを表敬訪問した様子¹⁶などがニュース映像として流れる程度である。

その中で、エジプト文化省の文化開発基金 (sunduq al-fanniya al-thaqafiya) が、二〇〇七年から、宗教音楽を通して異なる宗教・宗派間の交流と相互理解を目指すコンサートを開催するようになってきている。同基金は「平和のメッセージ」(risalat salam) という音楽グループを設立し、それにはイスラーム神秘主義のスーフイーのインシャード (宗教歌) を担当するグループ、コプト正教のタルティールとラフンを担当するグループ、キリスト教超教派の賛美歌を担当するグループ¹⁷が参加している。コンサート会場となるのは、同基金所管の「グリーン・ドーム芸術創作センター」(markaz al-ibda' al-fanni bi-qubbat al-ghuri) が多く、これは一般にスーフイー・ダンスと呼ばれるタンヌーラ¹⁸がインシャードとともに観光客向けに毎年披露されている場所(「伝統芸能のためのグリーン隊商宿創作センター」、markaz ibda' wikala al-ghuri li-funun al-turathiya) のすぐ近くにある施設である。両者とも、十六世紀初頭に建てられた建物で、フサイン・モスクやアズハル・モスクを擁するカイロの旧市街にある。

同基金のウェブサイトには、二〇一一年以降(ただし詳しい情報が掲載されているのは二〇一四年以降)の活動記録の写真が掲載されており、それによると、「平和のメッセージ」によるコンサートは少なくとも二〇一三年に一回、二〇一四年に八回、二〇一五年に七回、二〇一六年に九回、二〇一七年に六回、二〇一八年に四回開催されている (Cultural Development Fund 2019)¹⁹。「平和のメッセージ」が行ったコンサートには、時折インドネシアのイスラームの宗教歌を歌うグループ²⁰が参加し



図2: 「平和のメッセージ」によるコンサート

ており、他にも外国からのゲストが出演する場合もある。

「平和のメッセージ」が二〇一三年十月に行ったコンサートは、いわゆるアラブの春でデモや座り込みなど抗議行動の中心地となったタフリール広場で開催され、会場にはエジプト国旗が掲げられた。また、二〇一四年一月開催されたコンサートでは、「境界のない祖国」(watan bi-la hudud) というタイトルが掲げられ、その後も同じタイトルが繰り返し使用されている。ここから、「平和のメッセージ」は、音楽を通して宗教・宗派間の交流、対話と相互理解を目指すのみならず、宗教・宗派を超えたエジプト人としての連帯を訴えるものであることがうかがえる。

現在コプト共同体にとって直接的な脅威となっているジハード主義者たちに、こうした音楽による平和のメッセージが届くとは考えにくい。実際のところ、こうした宗教・宗派間の緊張を抱えた社会にとって重要なのは、どんな事件が起きようとも、他者を尊重すること、多様性に敬意を払うことの重要性を訴え続けることなのであろう。それが直接宗派对立問題の

解決にはつながらないとしても、また、所詮は政府の息がかかった茶番に過ぎなかつたとしても、こうした「聞こえない音」に居場所を与える試みすらも行われぬ／行えない社会にはなっていないことの証として、「平和のメッセージ」の活動には炭鉱のカナリヤ的な意味合いが認められる。もつとも、エジプト政府は「テロとの戦い」を掲げてジハード主義者との対決姿勢を鮮明にしており、かつコプトとの連帯を訴えていることから、近い将来カナリヤの身に異変が起きるとは考えにくいのであるが。

スーフィーに関していえば、二〇一七年十一月に北シナイのアリーシュ市で、スーフィーのジャリリーヤ教団の拠点として知られるラウダ・モスクが金曜礼拝の後に襲撃され、三〇五名が死亡、少なくとも一二八名が負傷した事件が発生した。この数年、シナイ半島では、ジハード主義者の武装組織が複数活動し、それを抑え込もうとするエジプト軍との武力衝突が繰り返されるなど、治安が極度に悪化している。こうした中、シナイ半島に住むキリスト教徒およびスーフィーたちは武装勢力の標的とされ、殺害や誘拐などの危険にさらされてきたのである。二〇一七年二月には、コプトの一三三家族（五四六名）が、武装勢力からの脅迫に耐えかねて、アリーシュ市からスエズ運河沿いの街イスマリーリーヤ市に移住したという事件も発生している (al-Misri al-Yawn 2017a)。その中で発生したのがラウダ・モスクの襲撃事件であった。

これを受けて、コプト正教会の現総主教タワドロス二世は、ラウダ・モスク襲撃事件の犠牲者たちとの連帯を示すために、エジプト全土の教会で十一月二十五日の正午に教会の鐘を鳴

らすように指示した (al-Yawn al-Sabi, 2017)。また、教会の公式声明として、ラウダ・モスク事件の犠牲者の遺族に哀悼の意を表明し、負傷者については早期の回復を祈るとした上で、テロ行為を糾弾し、エジプトの団結の固さを強調した (al-Misri al-Yawn 2017b)。

このように、かつては禁じられていた教会の鐘の音も、教会の外ではほぼ聞かれることになかったコプトの宗教音楽も、現在では宗教・宗派間の緊張関係の緩和のために「聞かせる音」となっている。コプト共同体が現在置かれている状況を考えれば、コプトを代表する音が政治性を帯びるのは仕方ないことであろう。しかしいつの日か、もう少しエジプトの宗教・宗派間の緊張が和らぐ時がきたら、それらのコプト的な音も、人々の日常生活に溶け込んだ「聞こえる音」のような意味で、エジプトの音風景の一部をなす音として受け止められるようになるのかもしれない。

【参考文献】

- イマーム・ムスリム・ビン・アル・ハッジヤージ著、磯崎定基・飯森嘉助・小笠原良治訳『日訳サヒーフムスリム』第三巻、日本サウディアラビア協会、一九八九年。
- 飯野りさ『アラブ音楽入門―アザンから即興演奏まで』スタイルノート、二〇一八年。
- 聖母マリア・聖マルコ・コプト正教会『聖母マリア・聖マルコ日本コプト正教会月報』二〇一九年〇一月号、聖母マリア・聖マルコ・コプト正

- なお、日本コプト正教会は日本ハリストス正教会式で教会関連用語の呼び方を統一しているわけではなく、例えばスラブ風の「イイスス・ハリストス」ではなく、「イエス・キリスト」「Bishop (usquf)」は主教ではなく司教としている(聖母マリア・聖マルコ・コプト正教会 2019)。
- 5 スンナ派の六つの主要なハディース集の筆頭であるブハーリーの『真正集』は、八四六年頃に成立した。
- 6 原語では *jaras* であり、鈴とも鐘とも訳せる。
- 7 イスラーム法上、人間の行いは、義務とされる行為、推奨される行為、許可される行為(してもしなくても良いこと)、忌避すべき行為、禁止される行為の五つに分類される。鈴／鐘を忌避すべき理由は、その音が精神を集中してアッラーを念ずることの妨げになるからとされている(イマーム・ムスリム・ビン・アル・ハッジヤージ 1989: 205)。ただし、同じハディースを根拠として、鈴／鐘を忌避すべきなのは旅行中に限定されるとか、忌避すべきなのは乗り物とする動物の首に鈴 (*zim*) をぶら下げることであるとする見解もあり、法解釈には法学派や状況に応じて幅がある。
- 8 後述するように、*haqis* はシンバルを意味する場合もあり、ここで言及されている楽器がどのような形状のものだったのかは不明である。
- 9 マカームとは音階を指す言葉で、それぞれのマカームには気分・雰囲気があるとされている。西洋音楽にも、長調は明るく楽しく、短調は暗く悲しいという性格づけがあるが、アラブ音楽のマカームは数が多く、さらに複雑に発展している。アラブ音楽のマカームについては、飯野(2018)などがわかりやすく解説している。
- 10 ムハッラク修道院は、正式名称を聖処女マリア・ムハッラク修道院といい、聖家族のエジプト逃避行で一行が立ち寄ったとされる場所に建てられている。
- 11 デイディムスとは、四世紀にアレクサンドリア教理校の校長を五〇年以上にわたって務めたギリシア教父、盲目のデイディムス (Didymus the Blind of Alexandria) のことである。
- 12 なお、YouTube には、カリフォルニア州のコプト正教会が作成したラフンの教材ビデオが掲載されており、この楽譜がどのように使用されるか動画で確認できる (Copts 4G: 2013)。
- 13 水野 (2008: 94) による記述では、この研究所はムフターフが私財を投じて設立したコプト音楽のための組織のように思われるが、実際には後に *Coptic Encyclopedia* を編纂したアズィーズ・スリヤール・アティーヤ(歴史学者)、『ムラード・カーミル(言語学者)』、サーミー・ガブラ(エジプト学者)らが中心となって設立された組織で、コプト正教会の神学、教会法、コプト語、コプト語文学、コプトの歴史、建築、美術、音楽など多岐にわたる学科を備えた教育機関である (Gabra 2008: 137)。
- 14 歌詞の一音節に対して二つ以上の音符を用いて歌う方法。コプトのラフンでは一般的にみられる。
- 15 Aghapy TV は二〇〇五年、CTV は二〇〇七年に放送を開始した衛星放送局で、前者はコプト正教会のブトゥルス司教の管轄、後者はコプト正教会の公式放送局である。他にも Al Hayat TV、Sat-7 TV など、エジプトで視聴できるキリスト教系の衛星放送局が複数存在する。
- 16 コプトの降誕祭は、二〇〇三年からエジプトの国民の祝日となっている。かつてムバーラク政権(二〇一一年)では、エジプト政府の代表として大統領の代理や大臣らが総主教座で行われる降誕祭のミサを表敬訪問していたが、スィー・スィー政権(二〇一三年)では、ジハード主義者という共通の敵がいる政治情勢を背景として、二〇一五年の降誕祭以降、毎年大統領本人が総主教座を訪れるようになった。
- 17 このグループには女性歌手も含まれ、ベートルヴェンの歓喜の歌など

をレパートリーとしている。

18 スーフィー教団の修行の一環として、巡回することによって神との合一をはかるもの。もとはトルコのメヴレヴィー教団（十三世紀設立）の修行方法であったが、エジプトに伝わって民衆の伝統芸能として定着した。現在では結婚式の余興としてタンヌーラが行われることがあり、二〇一八年に行われた筆者の友人（コプト正教徒）の結婚披露宴でもタンヌーラが披露された。

19 二〇一四年は一月十二日（写真のタイトルはサマールウだがコプト正教のカントルたちの姿が見られる）、二月十六日、三月二十三日、五月十一日、七月八日、八月三十一日、十一月二日、十二月二十八日の八回。二〇一五年は三月二十九日、四月五日、五月十日、八月三十日、十月四日、十一月十八日、十二月二十七日の七回。二〇一六年は二月七日、二月二十八日、五月二十九日、六月十二日、七月三十一日、八月二十八日、十月三十日、十二月十八日、十二月二十五日の九回。二〇一七年は三月九日、三月十二日、四月十六日、五月十四日、九月十日、十二月二十四日の六回。二〇一八年は三月十一日、六月三日、十一月十八日、十二月三十日の四回。

20 おそらくカイロ在住のインドネシア人によるグループと推測される。カイロには、アズハル機構への留学のためにやってきた東南アジア出身の学生やその関係者らが多数在住する。